

生を支える意志について

―フェレンツイとドルトを参照して(一)―

森 茂起

キーワード…死の欲動、生への意志、エディプス

1 問題設定

本論の主題は、筆者が児童福祉領域における心理療法や養護実践に関わってきた経験に由来する。それが、シャーンドル・フェレンツイとフランソワ・ドルトという二人の精神分析家の理論と実践に深く関わる領域であることには、特にドルトとの関連については、ずいぶん長い経験を積んではじめて思い至った。

ここで扱うのは、特に、出生をめぐる事情の人生史への位置付けという課題である。それは社会的養護実践において日々出会う課題であり、特に、「私は望まれて生まれたのか」という問いについて、またその問いへの接近法について考えておくこ

とは、子どもたちへの援助における必須課題の一つである。本論の目的は、何らかの結論に達することではなく、この主題に関する、特に精神分析の領域における、議論の可能性を探るものであり、扱わなければならないであろう主題や議論を簡単にスケッチすることである。本来必要なり厳密な検討はのちの機会に譲りたい。

「私は望まれて生まれたのか」という問いは、多くの子どもが一度は問う問いであろうが、逆境的な環境に育つ子どもにとつてはいっそう切実な問いである。そして、この問いは「私は生きるに値するか」という問いに結びついていることが少なくない。もちろん、どのように結びついているか自体、慎重な検討を要する主題である。

この問いは、記憶の残る幼児期以降の体験からの疑念、つまり親の言動や親との関係に由来する何らかの不全感に発する疑念にはじまり、多くの場合、そうした疑念を抱かせる親の言動や親との関係の起源を探る行為に向かうであろう。親との対話が可能であれば、親に直接問いかける行動に向かうかもしれないし、それが実りあるものになると思えなければ、あるいはそのような対話が成り立たない関係であれば、他の方法で探るであろう。親族に問いかける、古い写真から読み取ろうとする、出生をめぐる事情を残す資料を探すなどである。

私がこのような問いに特に関心を持つようになったのは、先

に述べたように、出生の事情を含む家庭背景に複雑な要素をかかえる子どもたちとの関わりからであるが、心理治療を望んで訪れる患者・クライアントにもこの問いへの関わりが欠かせない例は多い。

以上を踏まえて、「私は望まれて生まれたのか」という問いについて考えるために、ここではまず、フェレンツイがこの問題について論じた論文を参照する。次に、この問いを、エディプスの問題領域と絡めて考える。そして最後に、ドルトの仕事に言及して暫定的結論に至りたい。なお、記述の都合上、母親を想定しやすい表現が含まれるが、子どもを持つことを望む点で、父親と母親は同等と考えたい。

2 フェレンツイにおける「望まれない子ども」

そもそも、この問題を取り上げたのは、臨床実践における必要性とは別に、フェレンツイが一つの論文でこの主題を論じているからである。シャーンドル・フェレンツイは、ハンガリーで活躍した精神分析家であり、「取り入れ」という精神分析の基本概念を提出するなど、二〇世紀の一〇年代から三〇年代の初頭までの精神分析に多大な貢献を果たした(森、二〇一八)。

フェレンツイは、一九二〇年代後半から同時代の精神分析の潮流と袂を分かち、今日「関係論」という名で括られる理解の

先駆に当たる議論を積み重ねた。特に、幼児期の虐待的な関わりが子どもの成長に与える影響に注目して行った、「神経症の病因における外傷要因」(Ferenczi, 1933/1955, p.156 日本語訳 p.136)の再評価がその代表である。いわゆる幼児性欲を、性虐待の際におこる「攻撃者との同一化」の結果とする理解(Ferenczi, 1933/1955)は、欲動論から関係論への移行を典型的に示している。

ここで取り上げる論考は、そうした展開が進んでいた晩年に、「死の欲動」についてフェレンツイが書いた「望まれない子どもの死の欲動」(Ferenczi, 1929/1955)である。アーネスト・ジョーンズの五〇歳を記念した『国際精神分析雑誌』に寄稿された論文である。

ここでフェレンツイは、幼児期外傷が後年の風邪傾向に影響するというジョーンズの論文に触れ、その議論の射程をさらに遠くまで伸ばそうとする。彼は、二人の患者について、声門痙攣など幾つかの幼児期の身体症状を自殺傾向の象徴と捉えたのち、「患者は二人とも、いわゆる家族の望まれない客としての世に生まれた」(100)②と言う。一人は、明らかに負担過剰な母親の一〇人目の子どもであり、もう一人は、死の床にあり、実際間もなくなくなった父親の子どもであった。フェレンツイは、この子ども達が明らかに「母親の反感あるいは苛立ちの意識的、無意識的表れにおそらく気づいており、それらによつ

て生への意志をくじかれた」(100)と観察する。つまり、生後まもない時期に存在した、自らの生を欲迎していない環境が、子どもを死に傾かせたと理解する。まだ彼がその概念を提出する以前の論考だが、言葉を広く取れば「攻撃者との同一化」の一例とも言える。

次に彼は、「子ども時代から生の嫌悪が消えたことのない並はずれて重い症例」(101)であるアルコール依存の女性に焦点を当てる。自身の記憶からも、また家族への確認によっても、彼女は暖かく家族に迎えられていなかった。フェレンツイはこう言う。

「生きとし生けるものすべての起源について彼女が考えを巡らせるのは、いわば、彼女を暖かく迎える気がないなら一体なぜ彼女を生んだのかという答えられないままの問いの延長に他ならなかった。」(101)

ここには、「母親の反感」などの出生後の経験の影響だけでなく、出生前に遡る親や家族の「迎える気」、つまり子どもの生に先立つ、子どもを望む意志の重要性が指摘されている。これはむしろ、成長後に患者の想いの中で浮かび上がる問題である。この問題にはのちに返ることにする。

これらの観察に従ってフェレンツイは、生の欲動が人生の始

まりに最も強いと考える一般の見方に異を唱える。確かに、身体的にも心的にも胎生期から出生後の発達には目覚ましいものがあるが、それは「胎児と新生児が保護される特によい条件に恵まれたときに限られる」(102)。彼にとつて生の欲動は個人にとつて所与の条件ではなく、少なくとも部分的には、生後の世話の賜物である。「愛、優しさ、世話の膨大な投入によって、子どもは両親が子どもの意志にかかわらず子どもをこの世にもたらしたことについて両親を許すところまで導かれねばならない」(102)のである。これに続いて彼は次のように述べ、「死の欲動」の議論に私たちを導く。

「でなければすぐに破壊欲動が活動し始める。そしてそもそもこれは驚くべきことではない。なにしろ乳児はまだ個人としては非存在に近く、大人のように生の経験によって非存在から遠ざかっていないからである。」(102)

フェレンツイによれば、新生児は「非存在」に近く、出生後の期間は、個人が「非存在」から「存在」へと移行する期間である。出生は非存在から存在への突然の完全な移動ではなく、前者から後者への移動過程の一部である。なお、出生前に遡る期間まで視野に入れて個人の発生過程を考える視点は、彼にとつて新しいものではなく、中期を代表する著作、『性器理論の試

み】(以下英語タイトルにならって『タラッサ』(Ferenczi, 1923)にすでに展開されていた。そこでは、個人の発生過程に五段階の外傷、つまり「性細胞の成熟」「精子と卵子の生成」「子宮内での両者の合体」「出生」「思春期」が想定される。彼はこのうち「出生」を、系統発生における陸上生活への適応に相当するものと位置づけ、性交と睡眠を「大洋の環境への退行」と性格づける⁽³⁾。精神分析 (psychoanalysis = 心理分析) の範囲を超えて、「生の現象の精神的解釈」(Ferenczi, 1924/1989, p. 101)の可能性を探り、生命の分析的理解(生命分析 bioanalysis)を確立しようとする意欲的な議論であった⁽⁴⁾。

ただ本論で注目したい点は、生命分析自体ではなく、分析の対象に出生以前の生を含める構想である。ランクは、同時期に構想された「出生外傷」で、精神分析の対象を、出生という人生始まりの経験まで拡張したが (Rank, 1924/2007)、フェレンツィはさらに出生以前にまで視野を拡張したのである。ただし、これらの論考は、フロイトとランクの理論に刺激されながら、当時の生理学的知識を使って展開された思弁的議論の性質が強く、臨床経験との突き合わせは不十分であった。

フェレンツィはランクとの共著『精神分析技法の発展目標』(Ferenczi & Rank, 1923)で技法論の改訂をうたい、「積極技法」「リラクセーション法」と技法の変革を進め、特に、退行促進による治療を図っていった。その経験は、彼に、個人の生の発

生プロセスを別の観点、つまり幼児期の養育者との関係性から考える機会を提供し、晩年の関係論的視点を促進した。その一つの結果が、先に述べた「外傷要因」の重視だった。

「攻撃者との同一化」の概念を提出した論文の発想は、フロイトから否定されたが、実は、性の発現を関係論的に理解すること、つまり親との関わりに依存するものとして理解する視点自体は、フロイトにもある。ただ、普通「外傷的」とはみなされない通常の早期の関わりに含まれる接触到焦点を当てること、外的行為だけでなく、あるいはそれよりも、子どもが抱く空想の役割を重視する点が異なっている (Laplanche, 1976)。しかし、空想を重視する立場も、親が子どもとの関わりにおいて抱く空想まで範囲を広げると、幼児期早期体験は外的現実としての出来事と内的現実としての空想の両者が関わる相互関係として捉えられる。

この文脈を踏まえて「望まれない子どもと死の欲動」という論文をあらためて見ると、それがフェレンツィ晩年の関係論的、外傷論的展開と連動して、死の欲動をも関係論的にとらえる視点を提供していることがわかる。非存在から存在への移行を、生物的主体としての個人の発生から理解しようとした『タラッサ』と異なり、養育者との関係によって決定されるものとそれを理解する。言い換えれば、深い退行のなかで患者たちが表現した、望まれたかった、歓迎されなかったという願望から出発

して、フェレンツイは、死の欲動もまた関係によつて規定されると考えたのである。

3 幼児期体験と事後性

ここまでフェレンツイの議論を整理した上で、「望まれて生まれたのか」という問題に関係する臨床的課題を考えると、二つの領域があると思われる。

第一は、出生に始まる親子関係（養育者—子ども関係、あるいは出生に至るまでの親の状況が、子どもの成長に与える影響である。先に見たように、外的現実としての出来事や事情と親の内的現実としての空想の両者がここに関係する。出生以前の子どもの内的現実をどこまで考えるかは議論の仕方によるだろう。

この領域は、子どもの養育の問題としてすでに幅広く認識されている。「虐待リスク」の一つに「望まぬ妊娠」が挙げられるように、望まなかった子どもの養育には問題が様々起こる可能性がある（厚生労働省、二〇〇七）。いわゆる応答性の欠如、あからさまな拒否など、ネグレクトという言葉でまとめられる状況が発生しやすい。あるいは、望まないのに生まれてきて世話を要求する子どもへの攻撃という虐待にもつながる。養育しなければならぬことへの見返りとしての搾取、不適切な利用

という意味での虐待 *anuse* もありうる。極めて大雑把な描写だが、こうした養育の全てが子どもの成長に影響する。

第二に、性的体験の外傷性についてフロイトが述べた「事後性 *Nachträglichkeit*」に相当する問題がここにもある。つまり、出生時や幼児期に認識できなかった事情を後に知ることが子どもに与える作用である。自分が望まれていなかったと成長過程で理解することは、幼少期からの謎を解消する働きとともに、それ自体が外傷的な作用を及ぼす。多くの場合、知らなかった事実、隠されていた事実は、子どもにショックを与える内容である。失望、喪失、トラウマなどのどれに当たるか、またその複合かなどは、年齢、人格、関係などすべてとの関連で決まるだろう。

この二つの領域の存在を考えると、「非存在から存在への移行」とフェレンツイが呼ぶ事態をより詳細に記述する必要がある。フェレンツイの言うような「愛、優しさ、世話の膨大な投入」は前者の領域の課題である。後者の領域は、「彼女を暖かく迎える気がないなら一体なぜ彼女を生んだのか」という問いの背景をなしている。この問いは「暖かく迎えた」結果としての「愛」や「世話」に対してだけでなく、そもそも「なぜ生んだのか」に向けられているからである。おそらく彼女は、その問いに押されて、家族の背景や、親が自らを産んだ事情などを可能な限り調べたであろう。そして、長じてはじめて知った事

実もあるだろう。フェレンツイは、出生後の温かい世話の必要性に言及するのみで、出生に先立つ、あるいは受胎に先立つ事情や親の思いについて検討していない。しかし、出生前の親に向けられた彼女の問いは、「生きるに値する」という感覚にそれが関わっていることを表し、フェレンツイが問題とする「望まれない子どもの死の欲動」の問題の重要な要素と考えられる。筆者は、出生に先立つ親の思いを、出生後に子どもと親との間に発達する愛着関係や愛情関係から区別する必要があると考えている。前者は、むしろ子ども持つことを望む「意志」であって、それは子どもの存在がこの世に生まれ出るに先立ち、子どもを存在へもたらす働きをしたものである。自身の出生や受胎に先立つ親の意志についての子どもの問いは、過酷な家族背景を持つ子どもが発する本質的問いである。

子どもは、なぜ世話をしてくれなかったのか、酷い扱いをしたのか、という問いとは別に、なぜ自分を産んだのかという問いをもっている。ただし、「望まれて生まれた」という感覚が一定程度ある場合には、特段意識して問うことがない問いであろう。それはこの問いへの肯定的な答えが暗黙のうちに得られているからである⁽⁵⁾。

親側から見ても、子どもを欲しいという意志と、子どもへの愛情はある程度独立して存在する。子どもを持つ意志は、愛、憎しみ、兄弟、祖父母、病、経済状況など、性や愛を巡るあら

ゆる要素との関係で生まれる。生まれてからの愛情もまた様々の情況に依存する。強く欲しいと思つて産んだものの、子どもを可愛いと思えないことで苦しむ親が存在する。生まれてみれば可愛くなったという逆の場合もある。生まれてからの関係のなかでは愛されたように思えない子どもでも、「あなたを欲しくて生んだのだが、子育ての力がなくて可愛いと思えなかった」という事情があれば、一定の慰めになるものである。子どもにとって、親の「子どもを持つ意志の欠如」より、「子育て能力の欠如」の方が受け入れやすいように見える。フェレンツイの提起する問題を拡張して見えてくる親の意志に関するこの根本的問いに直面することは、たしかに心理療法師の課題の一つである。

4 エディプスと出生の秘密

出生に関わる親の意志を考えるには、いわゆるエディプス構造との関係に触れなければならない。ただしいわゆるエディプス期という肛門期に続く発達段階としてのエディプス概念ではなく、今までに見た、出生直後から始まる幼少期の親子関係と、事後的な作用の両者の意味においてである。

精神分析におけるエディプス概念の誕生は、先に触れた外傷論から欲動論への移行と重なっている(Wells, 2013)。その過

程で、議論の焦点は外的暴力から内的葛藤へ、外傷からリビドー発達へと移った。父によって象徴される第三者によるリビドー生活の構造化という理解がその移行で生まれた。この移行は同時に、父あるいは成人男性による暴力という特異な事態の理解から、一般的リビドー発達理論への移行を伴った。その後、エディプス概念は、「エディプス期」から「前エディプス期」に拡張され、乳児期の両親像の存在が焦点となった。その展開の主人公は、まずはクライン、次にビオンとラカンであった（Weiß, 2013）。その過程で関心は、リビドー生活から「考える働き」あるいは「象徴機能」に移行した。

ラプランシユが指摘するように、クラインの早期エディプス関係、あるいは乳児期の子どもが持つと言われる結合した両親像は、クライン派の外では馴染みにくい概念だが、出生以前に始まる親のエディプス構造に関わる空想、それが新生児に与える影響、その影響の中でいつからかという問いはさておき、発生する両親に関わる子ども空想という問題に光をあてるものであることは間違いない（Laplanche, 1970/1985）。その意味でエディプスは、両親がどのような思いの中で子どもを産み、育てたのかという本論の関心に直結する概念である。

もう一つの興味深いエディプスに関わる論点として、ソフォクレスのエディプス物語を、「見て見ぬふりをする turning a blind eye」の主題として読むシュタイナーの試みがある

(Steiner, 1985)。すなわち、自身が養父母の実子ではないことを知るいくつかの機会があったにもかかわらず、常にそこから目をそらし、知ることを回避してきたエディプスの態度を、ピオンのに、知ることへの攻撃として理解するのである。罪の認識の回避を問題の中核に置いているので先の虐待論とは視点が異なるが、「見て見ぬふり」の主題を、自身の出生の秘密に向ければ、本論の主題に直結する。エディプスは、出生の秘密をめぐる徴に接近しながら「見ぬふり」し続けるのである。

エディプス神話を「望まれて生まれたのか」の主題に結びつけるもう一つの切り口は、エディプスが生まれる前の父ライウスの人物像に注目し、彼の「子殺し欲望」に焦点を当てるものである。ライウスは、生まれたエディプスが将来自らを殺し母と契るといふ予言を聞いて恐れ、エディプスを殺害するよう召使いに命じる。しかしエディプスを哀れんだ召使いは、殺すに忍びなく、拾われることを願って川に流す。つまり、ライウスはまずエディプスの被害者として登場する。子どもが生きることを望まない父という主題がここにある。エディプス伝説の範囲では、神託によって子どもを殺そうとする父として現れるのみだが、実は、ライウスはそもそも残虐な殺害者、虐待者として神話に登場し、神託にかかわらず、「子殺し」に手を染めてきた人物である（小此木、二〇〇二）。

ライウスのこの人物像に注目し、デュブローは、残酷で病理

的な父の攻撃性を「ライウスコンプレックス」と呼んだ (Devereux, 1953)。そして、エディプスコンプレックスと対照的に、エディプスを殺人願望の主体ではなく、対象の立場においた。デブローは、児童虐待の存在を背景に、フロイトを批判的に読み直し、フロイトがエディプス出生以前のライウスの子殺し、あるいは性的暴力を意図的に排除したと論じる。ライウスコンプレックスへの関心は、その後も続いている (Ross, 1982, 1984; 小此木, 2002; Bergmann, 1992; Levy, 2011)。

虐待的な親の心理の理解をライウスの物語に求めるこの議論は興味深い。本論の関心は、父親側の問題ではなく、それを知ることが子どもに与える影響にある。言い換えるなら、「ライウスの子」としての自らを「生きるに値する」と受け止めることの困難と、その困難に対する援助のあり方である。たとえば、虐待臨床では、きょうだいを虐待によって失った子どもに出会うことがある。自身の親が子どもの命を奪ったという事実を受け止め、いわゆる「適応的」な理解に至るには、フェレンツイが「愛、優しさ、世話の膨大な投入」という表現で伝えた、並外れた環境からの働きかけに匹敵するものを要するのではないだろうか。

これに関し、バーグマン (Bergmann, 1992, p. 312) が治療的観点から提示している一つの問題を取り上げておきたい。バーグマンは、ライウスコンプレックスの視点が、子どもを父殺し

の主体ではなく犠牲者の立場に置くことを指摘しつつ、患者を犠牲者として見ることで、「治療が抵抗を受けにくくなる一方で、親への無意識的攻撃に光をあてる治療ほど深いものにならないのではないかと危惧するのである。今日でも、同種の危惧、つまり、子どもを犠牲者と見ることが罪悪感の回避になるのではないかと危惧が治療者から出るのを経験する。しかし、虐待的な環境に育った子どもへの支援では、自身を無垢な犠牲者とみなすよりも「悪い」子どもとみなすことを選ぶ子どもと多く出会う。「お父さんが叩いたのは僕が悪かったから」という説明は子どもの口からしばしば発せられるものである。いかなる子どもの問題を理由にしても正当化できないひどい暴力が行われている場合にも、こうした説明が子どもの口から出る。先ごろ報道された、東京目黒区の虐待死事例はその典型である (金子, 二〇一八)。

こうした例を考えると、犠牲者の側面を受け入れることの方が攻撃的側面を受け入れることよりも容易とは必ずしも言えない。自分を「悪い子」と認識し、非合理的な罪悪感が形成される要因には、親の見方への同一化、フェレンツイの言う「攻撃者との同一化」もあれば、良い親像を保ちたいという子どもの願望もあるだろう。また、本論にとって重要な要因は、子どもにとって、親が自分をはじめから望まなかったと考えるより、自分が悪かったから望まれなかった。つまり、親の望みに沿うこ

とができなかった自身の失敗に原因を帰する方が慰めとなることである。

5 考える働きの発達

親の子どもへの想い、そしてその想いに対する子どもの思い、という問題には、すでに述べたように、幼児期体験の作用と、「事後的」に知ることによる作用が重なっている。「望まれて生まれたのか」の問いは、長く潜伏し、考える働きの成長がある地点に達した時、はじめて直接問われ、「事後的」に知ることが個人に本質的な作用を及ぼす。しかし、構造としては二層構造を踏まえておく価値があるものの、私たちが実際に出会う臨床的課題には、二つの層が混合し輻輳していると考えられる。

その点を、ビオンに始まる「考える働き thinking」に関する議論を参照してもう少し考えて見たい。ビオンは、エディプス神話が考える装置の発達と対応していることに気づき、考える働きへの脅威となる母体としてエディプス神話のスフィンクスを読み直した (Bion, 1963; Symington & Symington, 1995)。考えることへの恐怖と、その恐怖を包容することを通して治療的関わりというビオンの実践論は、子どもが「私は望まれて生まれたのか」という問いに直面することへの支援に直結する実践論である。

ブリトン¹⁾は、ビオンを受け継ぎながら、考える働きにエディプス構造を適用し、「考えるための心的空間」を、父親と母親の関係、愛と憎しみの両者を含むその関係を認識するところに発すると理解する (Britton, 1989, 1998; Rushrigger, 2004)。クラインの結合した両親像の概念を、「考える働き」の観点から読み直したものである。

この考え方に基づく、「望まれて生まれたのか」について考えも、あるいはそれを考えるための「心的空間」の生成も、出生後間もない時期の両親と子どもとの関係、つまり幼児期エディプス構造に発していることになる。そして、考える空間の発達の結果、一定の年齢に達した時に、この問いについて考えることが可能になる。考えるための空間が成立していないときに、出生に関する事実だけ知っても、それは恐怖の対象となり、問いが回避されるか、歪んだ理解を生み出すかであろう。

ここで一つの実践的な問題に目を向けてみよう。つまり、両親あるいは片方の親の像が存在しないときに子どもの考える働きはどのような発達を遂げるのかである。親以外の養育者の役割と、子どもが持つ親以外の養育者像の果たす役割がここで問題となる。社会的養護における養育者の状況は多様である。親以外の養育者が中心の世話役となる場合も含めて議論するには、エディプス構造を、両親のみならず、複数の養育者間の関係一般に拡張しなければならない。実親以外の養育者が中心となる

場合、実親との関係という空想の中に展開するエディプス構造と、日々の生活の中で体験する複数の養育者との関係——ここにももちろん空想が関わる——で展開するエディプス構造が重なり合うため、その重なりがもたらす作用を理解する必要がある。

そして実際、その重なりを子どもがどう経験し、どうそれについて考えるかが重大な問題である。エディプス構造は、考える働きの基盤であると同時に、考える対象でもある。

こうした場合も含め、複数の養育者との関わりが子どもの考える空間の発達を促し、のちに「望まれて生まれたのか」の問いに直面することを可能にするだろう。ブリトンの議論を援用すれば、養育者間に葛藤も含む交流があることがまた重要である。複数の養育者が、自分の世話のために語り合い、ときには衝突しながら協力していることの経験が子どもにとって重要である。

考える働きの成長によって、理解できていなかった現実への直面が可能になるときがくる。親との関係が欠如していた子どもがふと「僕のお母（父）さんはどこにいるのか」と疑問を抱くときがあるだろう。ある子どもは、両親との関わりが全くないことから「僕は卵から生まれた」と言い続けていた。おそらくは子どもには親があるというすでに見えてきた現実に対して「見て見ぬ振り」をするために生まれた考えであろう。しかし、考える働きの成長により、あるとき「なぜ僕にはお母（父）さ

んがないのか」という問いに直面する。その問いへの答えは、成長によって深化する。一旦納得していた答えに対して後に再び問いが発生することは多い。ライフストーリーワークなどの進行によって、新たな事実を外から与えられて知ることも多い。それまでの理解を大きく変更しなければならぬ事態に直面することもある。たとえば、ずっと母だと思っていた人が本当は祖母だったと理解したとき、さまざまの事柄の意味が変わるのを体験する。あるいは、不在ではなく、「自分の親は自分を殺しかけた」という冷厳な事実と直面することもある。考えるための関係を提供しながら、こうした事柄を知る過程に付き添うのは養育者、治療者などさまざまな援助職の役割である。

「自分は望まれて生まれたのか」を考えるとき、子どもが求めるのはもちろん、「望まれた」という事実である。その際、一人の親から望まれただけでは十分ではない。複数の養育者による世話だけでなく、「自らの存在を望む親の意志」についても、それが複数でなければならないのではないか。これは、本論で私が提起したい仮説である。「父親には捨てられたが母親が自分の存在を望んでくれた」という考えは、たしかに一定の慰めではあるが、主体性をもった考える働きの成長にとっては限界がある。父親が自分のことをどう思ったのかという想いは続いていくだろう。事実に基づいて「望んだ」ことを確認できない場合、つまり、どちらかの親が自らを望まなかつ

たとは思えない場合、どのようにその思いと付き合い、成長するかという課題が発生する。

6 出生に先立つ三つの意志

フェレンツイの議論から出発して「望まれた」ことの重要性を確認し、エディプスに関する議論によって、望む「意志」が複数なければならぬという仮説に至った。ここでさらにこの議論を拡張するため、ドルトに目を転じよう。フランスの精神分析家、フランソワ・ドルトは、いわゆる標準的な個人精神分析の構造から外れた活動を活発に行った分析家として知られている。子ども病院における、複数のスタッフも同席する親子同席治療、子育てを支援するための「緑の家」活動、一般の子育て論への活発な発言、福祉実践への関わりなど、ドルトの活動は多岐にわたる。

ドルトは、個人の主体が現れる過程を、五つの去勢段階として理解するが、フェレンツイの五段階とは異なり、出生以後の過程を扱うものである (Dolto, 1984; 竹内二〇〇四, p. 111-121)。しかしドルトは、出生に遡る個人の生についても二つの形で述べている。まず、妊娠期間に母親と子どもとの間に存在する象徴的絆としてである。その絆のあり方は、出生後の子どもの無意識的身体像に刻み込まれている。したがって、妊娠期間のある

種の状況が子どもにトラウマ的な作用を及ぼすことがある。たとえば彼女は、妊娠期間に家族を失った母親の例を取り上げている。そのため、母親の意識から子どもの存在が全く消えた期間が発生した。その間、母親と胎内の子どもの象徴的対話が途絶え、子どもの無意識に身体像の歪みを残すとドルトは考える (Dolto, 1984, 日本語版 2, p. 4)。

次に、出生前の主体の存在に関する彼女の確信としてである。彼女にとつて、主体の存在は、出生前に始まるばかりか、さらに受精前にまで遡る。その確信をよく表す例がある。「ぼくなんか愛されていないんだ」という言葉を子どもから投げかけられた母親に、彼女は、このように子どもに問い返すことができると言う。「おまえの言うとおり!でもそんなこと言うなら、どうしてわたしを母親に選んだの? どうして選び方を間違ったの?」(Dolto, 1987, 日本語訳 p. 125)と。この問いは子どもが自身の生の主体になることを促進するとドルトは考える。彼女によれば、子どもの誕生は、両親と子どもの意志という三つの意志によって実現される (竹内二〇〇四, p. 64-66)。つまり、人間の心の核となる構造をエディプス三角形に置きながら、出生の時点まで、さらには受精の時点まで遡る構造とするのである。

このドルトのアドバースを、フェレンツイの例に適用するならば、「(私を)暖かく迎える気がないなら一体なぜ・・・生んだ

のか」と問う患者に、フェレンツィはこう問い返すことができることになる。「なら、なぜあなたは、あなたの両親を親に選んだのですか」と。この返答は、フェレンツィの観点からしてあり得ない返答である。フェレンツィによれば、子どもには生後の「優しさ」が必要であつて、それが欠けている場合、その失敗の責めは親が負うべきものである。先に罪悪感について述べたように、親の失敗を認識し、子どもの罪悪感を修正することが虐待臨床の目標とすれば、このドルトの姿勢は、出生前の意志にまで遡つて、子どもに責めを向けることを意味する。

ドルトにとつて、子どもは、生まれることを選んだときにすでに「生への意志」を手に行っている。このドルトの理解は、日々子どもに接する実践家の目からすると、子どもに伝えるにはいわばあまりに本質的すぎるといふ印象を与えるであろう。それは子どもを、さらに問うことをためらわせたり、混乱させたりしないだろうか。自身の主体に対する問いかけへの準備ができていない子どもの場合特にそうではないだろうか。

ここには、フェレンツィとドルトの基本的な相違が見える。ドルトは主体を受精以前に遡る私たちの存在の前提条件と考え、その全ての可能性が実現するために去勢が必要と考えるが、フェレンツィは、主体を非存在から存在への移行の過程とみて、篤い世話によって存在が実現すると考える。

ドルトの信念からは外れるが、ここで、先の議論を踏まえて、

「生まれ出る子どもの意志」にも「事後性」の観点を加えてみよう。つまり、その意志を、出生前の意志そのものにとらえず、そこに潜在的に存在しながら、出生後、しかも一定の期間を経て事後的に現実化するものと考えるのである。ある治療者が、自身の子育てのなかで次のような体験をした。思春期にある子どもと彼女が喧嘩したとき、子どもが「僕は一体全体なぜこんな母親から生まれることにしたんだろう」という言葉を発したのである。彼女はそのとき、子どもの主体が育つた瞬間、自身の生を自身の意志で選び直した瞬間と感じた⁽⁶⁾。出生前の「生まれ出る意志」を、事後的に理解されるものと考えると、その意志を肯定的に捉えることを妨げるどのような事情があれば、最終的に自身で選んだものとして生を受け入れるところに、養育や治療、あるいは生自身の目標があるのかもしれない。私たちの臨床の目的は、子どもの考える働きを促進する空間を提供し、最終的にこの意志への問いに直面できるところに至らせることにあるのではないだろうか。現実の臨床課題からすると、それは遙かな目標であるが、ドルトの言葉はそのような遙かな目標への視点を提供している。

ドルトとフェレンツィの間には、もう一つの相違を見ておく必要があるだろう。ドルトは、現在進行形の母子関係や施設で暮らす子どもたちに治療者として働きかける仕事をしており、現実の子どもの対話に関わつたが、フェレンツィの治療対象

は、成人患者の中の子どもであった。ドルトは、直接的関りによって母子関係を活性化し、違った対話の地平に導くことができたが、フェレンツイは、患者の過去の家族関係を変えることはできなかった。彼が関わっていたのは、患者の過去の経験に由来する、事後的な信念、認知、情動などであった。そしてもちろんこの両者とも今日の私たちの課題である。

7 実践論に向けて

「望まれた―望まれない」「意志された―意志されない」という次元は、多元的要素を含む発達過程を経ていく。養育者との関係だけでなく、後の他の人間関係、成功―失敗体験、自身の誕生に関わる知識、自身の人生の理解などがそこに関わる。子どもは、成長してから、親の心を洞察する能力を得てから、子育てがどういふものかを知ってから、自身の誕生の現実にあらためて直面する。何らかの慰めとなる事実を探し求める努力を続けた末、親が本当に自分を憎んでいたという現実に直面することがある。たとえば、レイプによる妊娠のように、受精のときから望まれていなかったという厳しい現実さえある。「望まれない」子どもと関わるとき、私たちの課題は、親の意志にも他の誰の意志にも直接働きかけるのではなく、存在の肯定に向かうことを目指してその子どもたちと関わることである。

では、実際にどのような治療的関わりがあるだろうか。

フェレンツイは簡単な示唆を提供しているわけではないが、『日記』の記述に見る限り、愛を提供することでこの課題を達成しようとしたようである。言い換えると、親に代って患者の存在を意志することを自らの課題としたのである。そしておそらく彼は、患者の愛の対象として自身を提供する方向に進みすぎたのであろう (Seefeldt, 2007)。たとえば、一人の治療者が愛することに成功したとしても、それは患者の生の肯定にとつて二つの理由で十分ではない。まず、意志は一つでは不十分で複数なければならない。第二に、その意志は、出生前になければならない。

では何が課題だろうか。生の肯定に到達する課題への処方箋をここで提供することはできないが、考慮すべきいくつかの要素を示すことはできるだろう。まず、「望まれない」ということ、あるいは「生の肯定」に欠損があることに直面すること自体が困難な課題である。以前、施設養護のケアワーカーに次のように課題を整理したことがある。

- (1) 出生への問い（なぜ産んだのか、なぜ生まれたのか）が、出生後の関わりと別に存在する。
- (2) 直面の困難は、問いそのものだけでなく、重要な他者（大人）の姿勢にある。共同での回避が起こりやすい。

(3) 問いかけられる前にその問いがあることを知っておくこと。その問いが大切であることを自分より先に知っている人がいることが重要。

(4) 問いへの直面は長期にわたる、おそらく生涯にわたる、課題。専門家の関わりは、その過程の一部だが、しかし深く関わる。

(5) 考える力をつける日常の関わりが全て貢献する。

これらは、心理療法家を含め、子どもと関わるあらゆる実践家にとって妥当であると考ええる。その過程は、個人の人生のあらゆる要素に依存して個性的であり、現在の状態に至るまでの過程の慎重な吟味が必要である。

「自らをこの世にもたらした意志」についての問いに直面する過程で、子どもは、その問いに自らが値するという感覚を育てるだろう。これ自体、「生への意志」を持った存在への一歩である。宗教的な社会では、神がその存在を意志したという答えがあり得るが、今日これを一般的な解決とすることはできないだろう。私の個人的な経験では、継続的に問い、考えることで、問いの新しい側面に気づいていく過程で、患者は、自らが生まれる意志をもっていたと考えると近づいていくと考えているが、その過程自体が、個人的であり創造的なものであると述べて終わりにしたい。

注

(1) 本論は、日本精神分析的心理療法フォーラム第七回大会(二〇一八年六月一七日、大阪経済大学)において発表した内容に加筆修正したものである。当日、同分科会においてドルトに関する発表をし、討論において貴重な意見をくださった、竹内健児、春木奈美子の両氏と、フロアの皆様に感謝します。

(2) フェレンツイの「死の欲動」論文からの引用箇所は、日本語訳の頁数を括弧内に示す。

(3) フェレンツイを代表する著作はながらく「タラッサ」とされており、なかでもこの「大洋的環境への退行」がフェレンツイを代表するアイデアとして言及されることが多かった。特に文芸評論にその傾向が強い。

(4) 個人の発生過程を生物の進化過程に重ねる発想は、フェレンツイの独創ではなく、フロイトがラマルクIIヘッケルの進化論に沿いながらメタサイコロジ論構想の中で書いた草稿、「転移神経症概要」(Freud, 1915/1987)の影響を受けたものである。フロイトはこの構想を発表しなかったが、フェレンツイに草稿を送っていたためである(十川、二〇一八)。

(5) 得られていない場合にはじめて切実なものとして浮かび上がる点では、バルントの言う「二次愛」を連想させる

(6) この箇所の「責め」の問題、「生まれ出る意志」の記述は、本論の主題の一部を国際フェレンツイ学会(2018, Firenze)で発表

した際の議論によっている。議論に参加してくださった方々、特に Joy Frankel, Carole Beebe Tarantelli の両氏にこの場を借りて感謝した。

文献

- Balint, M. (1968). *The Basic Fault: Therapeutic Aspects of Regression*. Tavistock Publications. (中井久夫訳 (一九七八) 治療論からみた退行 基底欠損の精神分析 金剛出版)
- Bergmann, M. S. (1992). *In the Shadow of Moloch: The sacrifice of children and its impact on Western religion*. New York: Columbia University Press.
- Bion, W. R. (1963/1984). *Elements of Psychoanalysis*. Karnac Books.
- Devereux, G. (1953). Why Oedipus killed Laius. *International Journal of Psychoanalysis*, 34, 132-41.
- Britton, R. (1989). The missing link. Parental sexuality in the Oedipus complex. In: Steiner J. (ed.) *The Oedipus complex today*. London, Karnac Books.
- Britton, R. (1998). Oedipus in the depressive position. In: *Belief and imagination*. London, Routledge.
- Dolto, F. (1984). *L'Image inconsciente du corps*. Seuil, Points Essais. (櫻本讓訳 (一九九四) 無意識の身体像 子ども心の発達と病理 1 二言叢社)
- Dolto, F. (1987). *Dialogues quebécois*. Seuil. (小川豊昭・山中哲夫訳 (一九九四) 子どもは無意識 青土社)
- Ferenczi, S. (1924/1989). Thalassa: A Theory of Genitality. Karnac Books.
- Ferenczi, S. (1929/1955). The unwelcome child and his death instinct. *The Final Contributions to the Problems and Methods of Psycho-Analysis*. Karnac Books, 102-107.
- Ferenczi, S. (1933/1955). Confusion of tongues between adults and the child. *The Final Contributions to the Problems and Methods of Psycho-Analysis*. Karnac Books, 156-167.
- Ferenczi, S. & Rank, O. (1923). *Entwicklungsziele der Psychoanalyse: Zur Wechselbeziehung von Theorie und Praxis*. Turia + Kant.
- Freud, S. (1905/1953). Three essays on the theory of sexuality. SE, 7.
- Freud, S. (1915/1987). Grubrich-Simittis, I. (Ed.). A phylogenetic fantasy: Overview of the transference neuroses (A. Hoffer, Trans.). Cambridge, MA, England: Belknap Press. (十川幸臣訳 転移神経症概要 メタサペロロニー論 講談社, 2018, 155-179.)
- 厚生労働省 (二〇〇七). 子ども虐待対応の手引き 第2章 発生予防 <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dr12/02.html> 閲覧 2018.12.25.
- Laplanche, J. (1970/1985). *Vie et mort en psychanalyse*. Paris, Flammarion. (*Life and Death in Psychoanalysis*: (translated by Jeffrey Mehlman), The Johns Hopkins University Press.) (十川幸司・堀川聡司・佐

- 藤朋子 (訳) (二〇一八)．精神分析における生と死 金剛出版)
- 小此木啓吾 (二〇〇二)．エディプス・コンプレックス．精神分析事典、岩崎学術出版社 38-41.
- Mori, S. (2017). Deconstructing the notion of “Asian Oedipus”: Focusing on an unwanted child. A paper read at Asian-Pacific IPA conference in Taipei, 4th May, 2017.
- 森茂起 (二〇一八)．フェレンツイの時代—精神分析を駆け抜けた生涯 人文書院
- 金子勇 (二〇一八)．児童虐待死の防止をめざした「子育て共同参画社会」づくり—虐待死児童の無念なを受け止めつ。一般社団法人平和政策研究所，政策オピニオン，<https://ippijapan.org/archives/1201>，閲覧2018.11.9.
- Kelly-Lainé, K. (2012). “Thalassa to the ocean”: from Sándor Ferenczi to Frani Dolto. *Ferenczi for Our Time: Theory and Practice*. (Eds. Szekacs-Weisz, J. & Kevé, T.) Routledge, 43-57.
- Rank, O. (1924/2007). *Das Trauma der Geburt*. Psychosozial Verlag. (細澤仁・安立奈歩・大塚紳一郎 (訳) (二〇一三)．出生外傷 みすず書房)
- Ross, J. M. (1982). Oedipus revisited: Latus and the “Latus complex”. *The Psychoanalytic Study of the Child*, Yale University Press, 37, 167-200.
- Ross, J. M. (1984). The darker side of fatherhood: Clinical and developmental ramifications of the “Latus motif”. *International Journal of Psychoanalytic Psychotherapy*, 11, 117-144.
- Steiner, J. (1985). Turning a Blind Eye: The Cover up for Oedipus. *International Review of Psychoanalysis*, 12, 161: 172.
- Szeceödy, I. (2007/2013). Sándor Ferenczi: the first intersubjectivist. Pages 31-41. Download citation <https://doi.org/10.1080/01062301.2007.10592801>.
- 十川幸司 (二〇一八)．訳者解説 フロイトメタサイコロジ—論 講談社，181-226.
- Zerubavel, E. (2007). *The Elephant in the Room: Silence and Denial in Everyday Life*. Oxford University Press.

(もり しげき／臨床心理学)